地球 第二十三卷 第四號 昭和十年四月一日

小藤先生の長逝を悼む

小川琢治

東京帝國大學名譽教授帝國學士院會員正三位勳一等理學博士小藤文次郎先生八十歳の高齢に躋り昭和十年三月八日終に二豎の厄に罹り東京牛込二十騎町の邸に薨去せらる。この訃報を聞くもの知ると知らざるとを問はず皆な一世の碩學の長逝を悼まざるなきも、我等親しく先生の講筵に陪し、先生の指教を受けたるものに至りては追慕哀惜措く能ざる固よりその所にして慟哭止むなきは至情の致す所に過ぎず。

先生安政三年石見國津和野藩士の家に生れ、藩貢進生に選まれて笈を東京に負ひ、明治十二年東京大學第一回卒業の唯一の地質學專攻の理學士となられ、同年創設の地質調査所員となられ、次いで留學生として獨逸に派遣され、ライプチヒ大學チルケル教授の下に岩石學を研究され、日本產岩

石に關する論文を提出してフィロソフィの學位を獲られ、歸朝後地質學を東京大學に講ずること四十餘年、告退の後も常に教室に在つて研究に耽り、老の至るを知らざるもの丶如く、先生篤學の風は幾多學者をして起たしめたり。今にして先生を喪ふは眞に岱宗崩れ梁木摧けたるの感に堪へざるなり。

先生は日本地質學の開祖にして、初めて顯微鏡に依る岩石學研究法を鼓吹され、結晶片岩及び片麻岩の成因を明にし、漠然トラカイトと呼ばれたる火山岩の眞性を確かめられたるは此の研究法によりたる結果の一部なり。先生の此の方面の成績は初めて學界に紹介されたる紅簾片岩と共に不朽の名を留めたりと言ひ得べし。

先生は又た屢々日本を襲ふ地震現象に深く注意され、明治二十二年熊本、同二十四年濃尾の兩激震地を踏査し根尾谷斷層を詳察されて、ジウス氏の造山性地震なるもの丶考說に對する動かす可らざる確證を提示されたるは、世界に於ける地震國たる本邦地質學の爲めに大に氣焰を揚げたる快擧として周知の事實なりとす。

震災豫防調査會の設立を見るに至り先生は火山調査を擔當されて教室內外の學徒の前面に立ちて指導倦むなく、數十冊の報告が此の事業成績の半ばをなすに至れり。就中大正三年一月の櫻島大噴火の現象は近年本邦火山活動の一異例にして、先生の周密精確なる現場の踏査と實驗室內の研究とにより中米ペレー火山の一九〇二年噴火に類似する眞性を明にされ、本邦地質學史を飾る先生の業績として大書されざる可らず。

日清戰爭後我が政治上の勢力漸く大陸に伸びんとするや、先生は挺身朝鮮半島を踏査され、その地勢地質の特色を正しく認識され、漸く問題化せんとしたる滿鮮交界地帶の性質に我が國民の注意を喚起されたるは研究に忠なる學者として敬服する以上に、又國家の前途に留心されたる耿々たる誠心を景仰せしむるに足る。

先生と同窓にして業を卒ふる前にナウマン先生を輔佐して地質調査事業を興されたる故和田維四郎先生が鑛物學の鼻祖たると並べて、斯學界の雙璧なるも、兩先生の性格互に異り、各その獨特の長處を發揮せられたるは我等後進者の等しく認むる所なり。和田先生は鑛物學を講ぜらるゝこと久しからずして、調査所長より鑛山局長に轉じ、後製鐵所長官となられて、鑛物利用の實際問題に沒頭され、尙ほ且つ終生鑛物學に深き興趣を持せられたり。先生は之と異りて徹頭徹尾學究的立場を離れず、從つて一般社會の注目を惹き又は名利に奔る如き傾向を深く嫌忌せられ、寧ろ世に容れざるも世に阿らざる淸白狷介の學者の眞面目を保持され、擧世濁流に浮游する間に超然獨往の淸操高節を標榜せられたり。和田先生により我等の享けたる所の大は大なるも、先生の鞭撻なかりせば我等學徒の氣品地歩は如何なりしか、之を思ひ之を想へば先生を喪ひたる今日我等地質學徒は奮勉一番先生の操持を景仰し、その遺功を失墜せざらんことを相誡め相勵まさざる可らず。茲に先生を弔ふの蕪辭を草するに當り、感慨に堪へざるなり。